

「不易」と「流行」 誠実・克己・忠恕

～「人皆、人に忍びざるの心有り」～

「性善説」は孟子の最も根幹をなす考えですね。
人間は善なる者とする根拠はと問われれば・・・この名言が出てきます。
孟子は次のように言っています。
「人には皆、『忍びざる心』要するに他人の不幸や命の危機を平気で見ていて、
あるいは見て見ぬふりをするには耐えられない心がある」と。
それは次のようなことから分かれるといえます。



「いま、よちよち歩きの幼児が井戸に向かって進んでいく。このままでは、
当然井戸に落ちる。これを見た瞬間に、誰でも、人間としての本性が働き
『これはいかん！』と何としても助けようとする。」

これこそが内部に潜んでいる人間性が顕わに表面に出る時だ。
そうしたときに、人間は決して次のような”計算”“や”思惑”をめぐらす
ことはないといえます。

「その幼児を助けることによって、その両親と親しくなるからなどと思うこ
とはない。地域から人命救助の名誉を受けたいからでもない。

助けず行き去ったとすると、それを見ていた人がいて、『情のないやつ』との
悪評が立つのを避けるためでもない。」

それではどのような力が働いて、瞬間的に助けようとするのかといえは・・・
「それこそが『惻隱（そくいん）の心』が働くからだ。」

と、孟子は言います。

『惻隱の心』とは、困っている人を見て、気の毒だと思ふ心です。人間には、生まれながらにこの心が
与えられている。この心が無い人間はいない。と孟子は言うのです。

さらに孟子は、あと三つ、人間には生まれ持つ心があるとして三つの心を挙げています。

- ・「羞惡（しゅうお）の心」：自分の悪を恥じ、社会の悪を憎む心
 - ・「辞讓の心」：譲り合いの心
 - ・「是非の心」：人間として「是」、よろしいか、「非」、よろしくないかを判断する心
- これらがやがて「四徳」である仁・義・礼・智に成長すると。

これに対し荀子は、「性悪説」を説きました。荀子は、人間には自分を律する力が無いといふのです。
人間はそもそも“悪い者”と言っているわけではありません。要点は「自律」なのです。

孟子は、人間には自分を律する力が充分にある。したがって、その人間性や徳を強化すべきだと説き
ます。

荀子は、人間は欲望を持つから自分を律する力は無いとします。では、どうしたらよいのか？

そこで出てくるのが他動的に律すること。つまり「礼」をもって秩序を正していくことなどを主張し
ました。

荀子の弟子の韓非子になると、「法」により人間を律することが確立されます。「法家思想」です。

「致知」10月号 四書五経の名言に学ぶ 東洋思想研究家 田口 佳史



同じく荀子の弟子の李斯（りし）は、秦の始皇帝の宰相となり、実際に「法治主義国家」の建国
に力を振るいました。（人気漫画『キングダム』に登場しますよね。呂不韋の四柱の一人）

「法の支配」と「法治主義」とは異なることは・・・みなさん・・・知ってます・・・よね？

考查1週間前です。『生徒指導部通心（信）』はお休みしますね。